<table>
<thead>
<tr>
<th>タイトル</th>
<th>モハンダース・カラムチャンド・ガンディー 特にその経済思想について</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>深沢 宏</td>
</tr>
<tr>
<td>発行誌</td>
<td>一橋論叢 55(4): 589-610</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>1966-04-01</td>
</tr>
<tr>
<td>形式</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/2881">http://doi.org/10.15057/2881</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
一橋論叢 第五十五巻 第四号 (92)

物であったため、彼の思想と実践は、早くから世界各国
の知識人の関心を集め、今日に至ってもなお多くの
研究文献が発表されている。

日本においても、ガンディーに関する研究は数多く
存在しており、彼の思想全般の特徴、彼の社会
改革思想、彼の政治思想と政治的実践、彼の教育思想など
について、既に個別の研究が発表されている。

しかし、以上のように、彼の経済思想をやや体系的に
考えてみると、彼の経済思想は、彼の政治思想と
政治的実践、彼の教育思想などについて、既に個別の
研究が発表されている。

そこで本稿は、彼の経済思想を中心に研究してみたい
とする。

ガンディーの経済思想を特に研究し紹介する理由は、
もしこれだけではない。インドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイニシアチブを推進し、実現するためのイ
ンドが大英帝国に占領された後、近代のインドを
具体的にどのように理解させるためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解させる
ためのイ
ンドが大英帝国に占領され
た後、近代のインドを具体的にどのように理解せる
その際成立した経済諸思想のうち、最も早く現れたのは「富の流出理論」（One Way Flow Theory）である。これは民族主義を強く結び、インド経済思想の一潮流となった。先鋭をつけてきたのは、ダルビュ・ナオロジー（八九〇年）の指導者、及び社会改革者としても活躍したのが「一九〇年代」であり、彼は、初期のインド国民会議派の経済状態を研究し、その結果、インド政策の年々の財政収入のうち、約半分に相当する領が、本国インディエンド省関係の利子、英印軍の海外活動費、インドに対する民間投資の利益などの形で、海外、特に英国に流出している事実を指摘した。そこでこれこそ、インドの貧困の「主要な原因」とある主張、従って、英本国政府とインド政府に対し、それが実施されれば、インドは自ら物質的繁栄を実現し、英国のより良いパートナーとなり得ることを強調したのである。

この「流出理論」は、英人行政官及び英人経済学者によって何度か批判され、それでもこれに対するインド知識人の反批判も繰り返された。こうして、それは、インド人自身の経済改革が必要であるという、一方で、インド人の社会改革が必要であるという、一方と同時に、他方で、インドの経済の自由放任政策を中止し、国営および工業の建設・民間工業に対する関税保護と利益保護、工業金融機関の設立、工業教育の振興、政府による工業の未発達・あるので、強調した。彼の思想は、まだ社会主義の傾向は見出されず、経済的には、資
これらのインド人は、ヨーロッパ系移民によって、一様に「苦力」と呼ばれ、日常生活の各路線で露骨な人種差別を受けていたのである。ガンドリ自身も、南アフリカに滞在していたとき、カーネル・ダンカンを連れて集会を開き、初めての公開演説を行なった。それは、一商人における誠実、二、身辺の需要潔、三、インド人の団結などを強調、インド人自身の自己改善を唱導するものであった。次いで一八九四年、南アフリカ連邦カタール州におけるインド人選挙権奪法の撤回を要求するため、在住インド人をを集めて集会を催し、「非暴力抵抗運動の意義」を唱導した。南アフリカにおける運動は、すべて恐怖政策による反対運動であった。こうして南アフリカにおける非暴力抵抗運動が一応終了した。こうして、南アフリカの政治家K・ゴーカレの要請もあったので、一九一五年インドに帰国することとなった。
心を示したのであるが、最初の一〇年間は特にキリスト教徒との交流が目立たなかった。彼は、キリスト教への改宗を勧められたがこれを謝絶し、キリストだけではなく、すべての人間が神の子である、人間だけではなく、すべての生物が神を持っています、と考えた。つまり、ヒンドゥー正統派哲学の根本にある「梵我一如」の思想が、彼にしていたのである。然し、同時にキリスト教徒との交流を通して、彼は、トルストイの作品に接することができた。彼は、「ガバドーギター」、トルストイのラスキンのこの「後の者に」を読み、甚大な感銘を受けた。

新たに、一九〇四年のある日、彼はまたまジョージ・ラスキンの「後の者に」を臨んで、書を読むことを決定した。彼は、この書を「行動の誤りなき指針」と見解して座右の書と定めた。特にその中には、不所有者の平等の教えが果たして指針に何かを意味しているか、彼は理解し、その富の「受託者」として自覚し、それを社会のために使用せねばならないことを意味していると、彼は理解した。そして又、一九〇一年に、ハネスバーグ市郊外の「デーパン農場」を作り、ここで、農耕、その他の労働に従事し始めた。

このようにして、彼の経済思想の成立は、彼の生活を歳々、年々と進行してしまったのである。彼の基本的信念が確固として成立したと思われる。「不所有」、「平等」、「自己の私有財産を一切放棄してしまったのである」。彼の経済思想の成立に関しては、もう一つの注目すべきことは、彼が、一九〇六年秋、R.C・ダットの「インディオ経済史」（第一巻、一九〇八年刊行、第二巻、一九〇八年刊行）を読んで、強い相識を受けたことである。

（99）モハンダース・カラムチャンド・ガンディー
1974, pp. xx—xxx

XI. K. Gendai: Nihon Jokan 1919—32, Keywords:

日本近代の言語学・文学学（1919-1932年）

日本近現代の言語学・文学学

石原和夫・竹村善雄

瀚原書房(株)
……

{'primary_language':'zh'}
my Experiments with Truth, p. 265
自然に読むことができるテキストがありません。

岡洋一郎『新東京伝』第25巻 全4部

第25章

第25章の終わりに、 Highlands の果てに殘る海道から、 無数の観光客が海を越えて来る。 その中から、 一羽の鳥が見えた。 

その鳥は、 高原の頂上を越えて、 大海原の真ん中に浮かぶ小さな島に飛来した。 

鳥は、 高原の頂上を越えて、 大海原の真ん中に浮かぶ小さな島に飛来した。 

鳥は、 高原の頂上を越えて、 大海原の真ん中に浮かぶ小さな島に飛来した。 

鳥は、 高原の頂上を越えて、 大海原の真ん中に浮かぶ小さな島に飛来した。